The Adventures of Huckleberry Finn: The First Paragraph of Chapter19

——Stylistics と Narratology の観点から——

上　田　　修

本論文では、アメリカ文学中名文とされている *The Adventures of Huckleberry Finn*（1884）第19章の夜明けの場面における文体および言語特徴を分析する。その際、stylistics だけでなく narratology の分野で展開・確立されつつある概念も適用した分析を試み、この場面の理解・解釈の可能性を広げてみようと思う。

The First Paragraph of Chapter 19:

1] TWO or three days and nights went by; I reckon I might say they swum by, they slid along so quiet and smooth and lovely. 2] Here is the way we put in the time. It was a monstrous big river down there--sometimes a mile and a half wide; we run nights, and laid up and hid daytimes; soon as night was most gone we stopped navigating and tied up--nearly always in the dead water under a towhead; and then cut young cottonwoods and willows, and hid the raft with them. Then we set out the lines. Next we slid into the river and had a swim, so as to freshen up and cool off; then we set down on the sandy bottom where the water was about knee deep, and watched the daylight come. 3] Not a sound anywheres--perfectly still--just like the whole world was asleep, only sometimes the bullfrogs a-cluttering, maybe. The first thing to see, looking away over the water, was a kind of dull line--that was the woods on t'other side; you couldn't make nothing else out; then a pale place in the sky; then more paleness spreading around; then the river softened up away off, and warn't black any more, but gray; you could see little dark spots drifting along ever so far away--trading scows, and such things; and long black streaks--rafts; sometimes you could hear a sweep screaking; or jumbled up voices, 4] it was so still, and sounds come so far; and by and by you could see a streak on the water which you know by the look of the streak that there's a snag there in a swift current which breaks on it and makes that streak look that way; and you see the mist curl up off of the water, and the east reddens up, and the river, and you make out a log-cabin in the edge of the woods, away on the bank on t'other side of the river, being a woodyard, likely, and piled by them cheats so you can throw a dog through it anywheres; then the nice breeze springs up, and comes fanning you from over there, so cool and fresh and sweet to smell on account of the woods and the flowers; but sometimes not that way, because they've left dead fish laying around, gars and such, and they do get pretty rank; and next you've got the full day, and everything smiling in the sun, and the song-birds just going it!

引用における 1] － 4] は text type 上の分類である。顕著な違いが生じている所で分類している。

〈duration & text type〉

概観：

引用における duration や text type には後述するように細かな揺れが見られるが、先ず、以下のように引用全体を概観することから始めたい。[1]

main text type ＼ duration	story	story	description	story
summary b)	1]			
summary a)		2]		
scene				4]
stretch/pause			3]	

Summary a)と b)は b)の方が ellipsis に近い。

表からもわかるように、1] －2] は summary（一部 pause であるがこの部分については後述する）であり、3] は stretch/pause、4]は scene であるという一応の範疇分けができる。つまり、1]－4]のそれぞれの discourse-time と story -time の関係は一定でなく、それらの差がだんだん短縮する方向へ進み（1] －3])、再び広がっている（4]）ことがわかる。また、story、narrative、argument の 3 text type の点からながめてみると、1] －2] ＝story、3] ＝description、そして4] ＝story に service する description、へと移行しており、動→静→動へ text type が変化しているといえる。

このような変化に富んだ構成にもかかわらず、読者のほとんどはこの用例における時間の流れに対し違和感をもたないであろう。それは、引用における意味の chunk（固まり）がすべて loose sentence structure に組み込まれていることや、各 clause/phrase の出現が“and” “next” “then”といった時の流れを表すものを伴っていることなど、表層の工夫によるものが大きいように思われる。[2]

詳細：

クリアカットに範疇分けできない部分はある。しかし、そのような部分の観察こそ様々な点に気づかせてくれる。例えば、duration では、各 summary や scene での duration の性質が各 chunk ごとに微妙に異なっていることがわかる。1] の summary 部 “Two or three days and nights went by”と 2] では、前者がわずか 8 語による days を単位にした「時間経過の紹介」である一方、後者は44語による daytimes/nights/dawns の単位による「過去どのように過ごしたかという内容紹介」であると言う点において、同じ summary でありながら前者より後者の story-time と discourse-time とのギャップの方が減少していることがわかる。

分類上曖昧な部分は text type にもみられる。例えば1] での summary には “I reckon I might say they swum by, they slid along so quiet and smooth and lovely.”という thought presentation が見られる。この clause が前の “Two or three days and nights went by”を言い換えているという text type 上の機能(argument)を意識すると、1] は argument が story に service している text と言えるであろう。また、main text type が story である 2] には、“Here is the way we put in the time. It was a monstrous big river down there--sometimes a mile and a half wide ; ...” “the water was about knee deep,...”のような copula を使った断言文が見られる。これらは明らかに、text type 上 description である。当然この部分は chrono-logic[3]ではないので story とは考えられない。これはいわゆる、story に description が service している例と捉えてよいかもしれない。(その後にも “the dead water under a towhead” “young cottonwoods and willows” “the sandy bottom”などの description の要素を持つ noun phrase が見られるが、これらはむしろ story の text type で生じている表層的で偶発的な description 的要素と考えた方がよいと思われる。)

このような複数の text type 同士の助け合いもまた「スムーズな時間の流れ」の印象を読者に持たせる要因のひとつであろう。

作品全体の文脈とのかかわり：

ここで注目すべき事は、この引用では story---明らかに story-time が存在する text---と考えるべき部分がその半分以上（1]、2]、4]）を占めていながら、この引用は作品全体の文脈でとらえた場合、Huck と Jim の過去数日間の生活を紹介している（1]、2]）ということ以外、plot 進行上の意味---story は物語内の時間の進行にかかわるという意味---においてほとんど意味をなさないと言う点である。2] のように story として機能している部分でも、単調な文構造 “(we)＋動詞（過去)” の繰り返しという文体上の特徴が二人の筏上での生活の単調さを強調しているとは言え、全体の plot の進行に大きな意味を持っているとはとても言えない：

we	put in the time.
we	run nights, and laid up and hid daytimes;
we	stopped navigating and tied up--nearly always in the dead water under a towhead; and then cut young cottonwoods and willows, and hid the raft with them.
Then we	set out the lines.
Next we	slid into the river and had a swim, so as to freshen up and cool off;
then we	set down on the sandy bottom where the water was about knee deep, and watched the daylight come.

(“run”は方言的な使用と思われる。)

また、作品全体の文脈からすると、3］における夜明けの description はさらに存在意味を持たないように思われる(narratology 上 copula 中心の description では story-time がゼロに近い)：

(There)	(was)Not a sound anywheres--
(It)	(was) perfectly still--
(It)	(was) just like the whole world was asleep,
(There)	(were) only sometimes the bullfrogs a-cluttering, maybe.
The first thing to see, looking away over the water,	was a kind of dull line--
that	was the woods on t'other side;
you	couldn't *make* nothing else *out*;
(the thing to see) then	(was) a pale place in the sky; then more paleness spreading around;
then the river	softened up away off,
And (it)	warn't black any more, but gray;
you	could see little dark spots drifting along ever so far away-- trading scows, and such things; and long black streaks --rafts
sometimes you	could *hear* a sweep screaking;
or (you)	(could hear)jumbled up voices,
it	was so still,

(丸括弧は筆者による。)

3］においては、坦々と時が流れている様子がうかがえるが、それは各 chunk が story 的な要素をもっているからではない。各 chunk は、“S + copula”または知覚動詞（句）“make out” “see” “hear”による non-active な内容であり、典型的な description である。さらに、“Not a sound...maybe.”では、copula を省くことで、時制の存在を消している。このような事にもかかわらず、「時間が流れている」という印象を読み手がいだきがちなのは、各 description に見られる “The first thing” “then（2）” “And”などの表現が一因となっているように思われる。では、このような chunk は作品全体の story という文脈では、どう解釈できるのだろうか。3］について、多少文体分析も加えながら考えてみたい。

Description 3］：

3］を読むとき、読者は躍動感を直感的に感じるのではないだろうか。躍動感だけではないが、ある一定の感覚を読者に持たせるような passage には、明示的または暗示的に組み込まれた繰り返しの構造があるのが常で、その構造を探ることが、文体研究の第一歩といえるかもしれない。このような文体論的な視点から観察すると、3］にも繰り返しみられる構造があることに気づく。それは、以下に示されたような知覚→認識または自問→自答のパターンの繰り返しである：

知覚または自問	認識または自答
a kind of dull line	the woods on t'other side
a pale place in the sky more paleness spreading around	(the dawn was approaching)
the river softened up away off, warn't black any more, but gray	(the dawn was approaching)
little dark spots drifting along ever so far away	trading scows, and such things
long black streaks	rafts

（括弧内の内容は筆者の付け加え）

表にみられるパターンに焦点をあててこの引用を読み返すと、narrator Huck が、story の世界を経験していた時の自分が行った認知プロセスを再現し、提示しようとしていることが見えてくる。protagonist Huck は、夜明け前の暗い中で、ぼんやりと見えるものを知覚し、そのつど認識しているのである。この知覚→認識というタイムラグを伴った story での認知プロセスは、ページ上左から右へと単語をおいながら（時間をかけて）内容を認識する読者の心理上のプロセスと一致しているように思われる。protagonist Huck の心理上の時間の流れが iconic に暗示されているのである。一見 description と思えるものが story によって service を受けているわけで、この３］は作品全体の中で一種の tableau 効果を生みだしていると解釈できる。また、ここでの知覚→認識・自問→自答のプロセスは adventures における心理プロセスでもあり、この小説全体に渡り繰り返されているものである。つまり、ここでの夜明けの description は、adventures というより大きなプロットを包含しており、文体上一つの thematic なの構造を具現しているものと考えられるであろう。

〈narratology と stylistics〉

realism：

読者の持つ「躍動感」の印象は、読者が、narrator Huck によって上記の認知プロセスの共体験を強要され、それに従うから生まれる。このような implied reader と implied author との共体験は realism の要素の一つと言えるように思われる。言い換えれば、読者の協力がなくては realism の文体効果は生じないのである。ページを追って読み進める、また、逆戻りして読み返すという読者のダイナミックな操作が伴うのは、小説の宿命であり、このようなリーディングのプロセスの中で、見逃していた事に後で気づくというのも宿命的に起こり得ることであろう。narratology のアイディアが story /discourse の解釈の可能性を広げるのではないかと思われる点の一つは、この「読者の協力」という点をクリアにしようとしている点にある。

implied author Huck と protagonist Huck：

読者である我々は、protagonist Huck が story の世界から直接話しかけているとか、彼の認知プロセスをそのまま具現化していると思いがちである。もちろん、このような discourse level を考慮しない見方も存在するであろうが、いかがなものであろう。この fiction には、少なくとも story 世界の Huck、discourse level の Huck、implied author としての Mark Twain、人としての S. L. Clemens がかかわっているのは理論上理解できるのであるから、素直にそのレベル分けを受け入れたいと思う。また、このレベル分けは story と discourse の両レベルを考慮する narratology などの分野では厳格に守られるべきであろうし、文体を考える際も考慮すべき点のようにおもわれる。であるから、前述のように、この例では、実際は、表層テクストでは第二レベルの implied author/narrator Huck が、自分の経験した世界の記憶をたどって implied reader へその記憶を示している、と捉えた方がよさそうである。このように捉え直すと、解釈の可能性が広がるようにおもわれる。次の例を考えてみたい。

I reckon I might say they swum by, they slid along so quiet and smooth and lovely.

数日に渡る Jim との筏上の生活の様子が、Huck によって summarize されている。この clause は、表層または文体上の範疇としては、IT (Indirect Thought) である。Thought presentation であるから、我々は、あたかも protagonist Huck と narrator Huck とが、同一のレベルあるいはそれに近いレベルで、自分の考えを IT の形で表現していると考えがちである。しかし、これは、先に述べたように、「story を経験している Huck--story level」と「それを報告している Huck--discourse level」とを混同した捉え方といえるだろう。protagonist Huck の経験した世界へは narrator Huck は決して介入できないのである。しいて言うならば、両 Huck のアイデアがここでは一致していると考える方が妥当であるように思われる。

I reckon で始まるこの clause が I might say に従属したもう一つの clause をもっていること（might の使用は argument

の一部として機能している)、時の流れを筏での生活にたとえた比喩表現（they＜days＞と swum/slid とのコロケーションは unusual である)、さらに Huck の判断を示す表現 so quiet and smooth and lovely（方言の要素--ly の欠如--および冗長な表現が話し言葉の色彩を強くしている）などの使用、これらを考慮すると、この clause が、記憶をたどりながらその統語や語彙選択に普通以上の注意を払っている narrator Huck によって提示されていることに気づく。決して story level の Huck の思考がそのまま現れているのではなく（両レベルのものが一致している場合はあろうが)、narrator Huck が報告すべき内容をどのように提示すべきか--つまり discourse 方法--を考えた結果が現れていると考えられる。明らかに protagonist Huck と narrator Huck は違うということが言える。

アイロニックな伏線：

以上のことは、いわゆる slant と filter の区別にかかわることであり、この２つはやはり混同するべきではないと思われる。なぜならば、先ほど述べたように、この二つのレベルを認識することは、内容や言説に対する読み手の standpoint を明確にし、さらに解釈の可能性をひろげるからである。例えば、(narrator Huck を意識した）読者は、筏上の生活の平穏さがこのすぐあとに現れる king と duke によって崩されることを知ったとき、ここでの narrator Huck のアイロニックな伏線の劇化に気づくかもしれない。narrator Huck は筏上の生活の平和を伝えるのみで、これから起こるトラブルについては言及していない。彼は、明らかに情報量を操作している--Maxim of quantity の違反をしている--という解釈がなりたつわけである。[4]

これから起こることを知らず筏上の生活の平穏さを満喫している protagonist Huck と情報制限をしながらアイロニックな伏線をしく narrator Huck、これら二つのレベルの Huck の存在を考慮に入れると、「narrator Huck は、登場人物として story の世界に存在する Huck に一種のドラマティックアイロニー的なフィルターをかけることで、後に現れる king と duke の存在の負の要素を強める準備をしている」という見方が出来るかもしれない。さらにこの後においても、narrator Huck は“and next you've got the *full* day, and everything *smiling in the sun*, and the *song-birds* just going it!”[5]とコンベンショナルに[+PLESURE]の意義素を持つ語・句を使用し、protagonist Huck の pleasant な様子を聴き手に強く伝え、アイロニックな伏線を強化しているという解釈も不可能ではない。

〈今後の可能性・課題〉

さらにこのことに関連して言うならば、story 世界の Huck は｛未来を知らない｝のであるが、narrator Huck は｛未来を伝えない｝のである。このことは、narrator Huck が読者にとって unreliable narrator であるという解釈も生む。story 内の Huck はその場しのぎの嘘をいたるところでつきながら、のらりくらりやっていくわけで、その Huck が narrator となった場合、読者に嘘をつかないとは考えにくい。１章におけるモーゼに関する記述などは、明示的な嘘の例であろう。このような unreliable narrator Huck の存在、特に暗示的に嘘をつく彼の存在を意識することは、一見 stylistics の枠を越えているように思われるかもしれないが、子供と大人双方へメッセージを伝えている本作品を解釈する上で新しい面を見せることに役立つことは間違いない。例えば、彼の Jim に関する記述をこのようなアイデアをもとに考察し直すことは興味深い。と言うのも、彼の Jim 像には一貫性を欠くものがあり、Jim や黒人に関する情報を隠し持っていると思われるところがあるからである。これらの考察は、今後の課題とする。

注

1　本論での narratology の用語は主に S. Chatman, *Story and Discourse : Narrative Structure in Fiction and Film* および *Coming to Terms : The Rhetoric of Narrative in Fiction and Film* (Cornel Universtiy Press, 1978・1990) を参考にしている。以下、text type と duration についてまとめておく。

story の特徴は、時間と論理性の２重性である。この時間は「外的」時間（作品の継続時間、実際に読む時間）と「内的」時間（作品内での出来事の持続時間、fiction 上の時間）の進展を伴う。前者は discourse（物語言説）の次元、後者は story（物語内容）の次元で作用する。description には内的な時間の次元は一切ない。Argument は、オーディエンスに、ある命題の妥当性を（演繹／帰納的に）説得する text であり、通常、より抽象的な基礎に基づいている。

duration は Chatman によって、story-time と discourse-time との関係から以下の５種類に分けられているが、十分なものとは言えない：

Pause : discourse-time is longer than story-time and story-time is zero.

Stretch : discourse-time is longer than story-time.

Scene : discourse-time and story-time are equal.

Summary : discourse-time is shorter than story-time.

Ellipsis : discourse-time is shorter than story-time and discourse-time is zero.

2　この引用はすべて loose sentence structure で構成されている。複数の clause がある文では main clause が常に先行してあらわれている。これは平易な文章の大きな要素であるし、この特徴は、話し言葉の印象やスムーズな時間の流れの印象を強めるようにおもわれる。

3　“chrono－logic”に関しては Chatman（1990）参照。

4　Slant と filter に関しては Chatman（1990）参照。

5　イタリックスは筆者による。